

殺しの美学

藤野義雄著

藤野義雄

近世文学専攻 文学博士

著書

- | | |
|----------------|--------------|
| 『近松の世話悲劇』 | 『歌舞伎美の性格と形成』 |
| 『近松名作の解釈と批評』 | 『歌舞伎大観』 |
| 『近松浄瑠璃解注』 | 『歌舞伎の時代物』 |
| 『近松と最盛期の浄瑠璃』 | 『丸本歌舞伎』 |
| 『近松と西鶴』 | 『歌舞伎名作選』(5巻) |
| 『丹波与作待夜の小室節評釈』 | 『日本の芝居』 |
| 『曽根崎心中解釈と研究』 | 『美と陶醉の舞台芸術』 |
| 『心中天網島解釈と研究』 | 『芸術学』 |
| 『冥途の飛脚評解』 | 『解注近世文学』 |
| 『仮名手本忠臣蔵解釈と研究』 | 『日本文芸評説』 |
| 『菅原伝授手習鑑評解』 | 『日本文芸概論』 |
| 『仮名手本忠臣蔵評解』 | 『坪内逍遙と名古屋』 |
| 『歌舞伎の美学』 | 『日本演劇書目解題』 |

写真協力

斉藤興子・中野英伴・前進座・御園座

『殺しの美学』

女殺油地獄・解釈と鑑賞

定価 4,800円

発行日／昭和60年9月1日

著者／藤野義雄

発行者／西田啓二郎

発行所／有限会社 向陽書房

〒541 大阪市東区備後町3-8

TEL (06)222-5610

印刷所／橋本龍正社

ISBN4-906108-10-5

C0091 ¥4800E

殺しの美学

女殺油地獄・解釈と鑑賞

藤野義雄著

向陽書房



カラー写真撮影／斉藤興子
与兵衛（中村扇雀）・お吉（沢村田之助）

昭和59年5月・国立小劇場にて

も
く
じ

もくじ

上の巻・徳庵堤

野崎参りの屋形船……………10

天王寺屋の小菊……………15

お吉と与兵衛……………19

土手の喧嘩……………25

八弥の温情……………33

中の巻・河内屋

山上参りの下向……………48

徳兵衛の述懐……………54

与兵衛の策略……………63

与兵衛の勘当……………73

下の巻・豊島屋

不吉な予感……………88

真綿で首……………95

粽一把に銭八百……………100

油の地獄……………113

新町と北の新地……………133

三十五日の逮夜……………148

与兵衛の逮捕……………154

屏絵／植木 力
装幀／池田悦子
編集

上の巻
徳庵堤



野崎参りの屋形船

〔一〕歌舟は新造の乗心サヨイヨエ。君と。我と。我と君とは。詞図に乗った乗って来た。しつとんとんくしとんとんく。しつとと逢瀬の波枕。盃はどこ行た。オンド君が盃いつも飲みたや武蔵野の。月の。月の夜すがら戯れ遊べ。ナラス囃し立てたるフシ大騒ぎ。ハルフシ北の新地の。地中料理茶屋。主なけれど咲く花や。後家のお亀が請込んで。客の替名は蠟九とて生れは陸奥会津にて名代流さぬ金遣ひ。此の比難波此の里へ上り詰めたよ天王寺屋。小菊を思ひ。思はれたさに。鯉川よりゆらくと。スエテ野崎参りの屋形船。卯月半の初暑さ。小オクリ末の。閏に追繰りてまだ肌寒き川風を。酒に凌ぎてウフシそゝり行く。昔在靈山名法華。今在西方名阿弥陀。娑婆示現觀世音。三世の利益。三年続き。去々年戌亥の春は。裏屋背戸屋に罪深く。針櫛箱や。数珠袋。底に日の目も見ず知らぬ。フシ一もん不通の衆生まで。ハルフシ千手の御手の。擲取。紫磨黄金の御膚にたちまち那智の觀世音。去年は和州法隆寺。シテ聖徳太子のタ、キキン千百年忌。ッこれ又救世の大悲の化身。シテ続いて今年此のさつた。二人桜過ぎにし山里の。誰訪ふべくもなかりしに老若男女の。

フシ花咲きて。足をそら／＼空吹く風に。散らぬ色香の伊達参り。大人
童もうたふを聞けば。歌行くもちんつ。帰るもちんつ。又来る人もちんつ
ちりつて。チリテツテ。

へ歌舟は新造の乗心サヨイヨエ

君と 我と 我と君とは

詞図に乗った乗って来た

しっとんとん／＼しとんとん／＼

しっとと逢瀬の波枕

杯はどこ行た

ランド君が杯いつも飲みたや武蔵野の

月の 月の夜すがら戯れ遊べ

浮き浮きとはずんだこの騒ぎ歌は、曾根崎新地の料理茶屋・花屋の後家お亀が借り
受けて客を遊ばせる屋形船の中から聞こえてくるもので、乗っている男の替名は蛸丸
といって、生まれた所の陸奥会津では金の使いぶりで評判になった田舎大尽。このごろ
大阪に来て遊郭に通いつめ、天王寺屋の小菊にすっかりはれこんで、情をかけてもらい
たさに、鯉川からゆらゆらと、船にゆられて野崎参りのためやってきたのだった。

今年、すなわち享保六年（一七二一）は、後の七月が閏であるため、暑さが順に繰
り下げられ、初夏の四月半ば（下の巻によると四月十一日）でありながら川風がまだ
肌寒く感じられるのを、酒の力でもちこたえながら浮かれ行くのである。

天台宗僧侶間に伝えられた四句の偈文によると、昔釈尊は靈鷲山にあって法華経を
説き示し、今は西方極楽において弥陀と称して衆生を救い成仏させ、人間の住む現世
に観音となつて姿をあらわし、一切の人類を導かれるという。

すなわち、釈尊・弥陀・観音の三尊は、名称こそ異なるがもと同一体で、過去・現

在・未来の三世にわたって、あらゆる人々に仏の恵みをほどこされるのである。

だから、そうした恩徳をしたって、去々年・去年・今年と三年にわたって大法会が各所で催され、一昨年つちのえ亥（享保四年は、つちのと亥が正しい）の春は、那智のお山の御開帳で、前世の罪が深いためか裏屋住まいをしてひっそりと暮らしていた無智文盲の貧乏人まで針箱・櫛箱・数珠袋の底にあって日の目も見ないでいた小銭をはたいて奉納したので千手観音（千手観音とするのは筆拍子、実際は如意輪観音）は千本の手でこれをつかみ取りし、たちまち紫磨黄金の光り輝く仏となり給うた。

そして去年は大和法隆寺において、救世観音の化身とされている聖徳太子の千百年忌があり、続いて今年には野崎村の十一面観音の御開帳となった。

桜の時期も過ぎてわびしいこの山里は、だれとて訪れる人も無かったのに、後から後から老若男女がにぎやかに足も軽く、空吹く風にも散らぬ色香をただよわせた若い女もまじって遊山がてらの参詣者がやってくる。その中には、

～歌行くもちんつ 帰るもちんつ

又来る人もちんつちりつて チリテツテ

と、口三味線でうたう者もあって、そぞろに心も浮き立つ野崎参りである。

《注解》

「舟は新造の歌」 「松の落葉」巻四、しんぞ踊「君は新造の乗り心、さよいよえい／＼君と我と、我と君と引き寄せてはよるよるさ、男は花の都入り、づに乗った、乗って来た／＼舟のや、宿の娘は小手招き、えい袖をかざして表の潜戸のくろくの穴から／＼から／＼から／＼そこしんから／＼顔が見たさに戸開けて、そこせいちゃうど一ぱい君はよい酒」の前半部を取り、同じく「松の落葉」巻四、しんとん踊りに「しんとん／＼しんとん／＼しんとん、しんとん／＼とん／＼とん／＼」のはやし詞が出ているから、それをまぜ合わせてつづったものである。「新造」は、遊里に新しく出た若い遊女の称。禿から一本立

となつた者もあれば中年増^まの者もあるが、十四、五歳で水上げ前後の若い妓^こをいうのが通例で、船を新しく造り立てる意から出た語。『山家鳥虫歌』に「人の娘と新造の船は人が見たがる乗りたがる」の流行歌が出ている。若い女を船にたとえて「乗心」といった。

〔図に乗った〕 予想したとおり調子のよいこと。

〔しっとん〕 しっぽりと同じで、しめやかなさま。男女の仲のこまやかなこと。

〔波枕〕 船の中で行われる男女の情事を暗示する表現。

〔武蔵野〕 野見（飲み）^{むさし} 尽くさぬ意で、大杯のことを言う。このところ「若みどり」四、照る月「月は武蔵野、呼び出しの女郎を三日月、だてな道中袖^{もも}の月、誰^{たれ}を待つ宵あ顔つき、年は十五や腰つき足つき、冴^さえた声つき、何夕月よ、桂男^{かつら}よいとしかござれ、かあいかがござれ、いざよひ月に戯れ遊べ、えいえい遊べ、えいえいえいえいえいえい、照る月照る照る月を見明かし飲み明かす」や、『松の落葉』に出ている「月は武蔵野^{むさし}よい突き出しの……十六夜^{いざよい}月に戯れ遊べ」などの流行歌によって文を成したものの。

〔屋形船〕 屋根を設けた船で、多くは遊山用。江戸時代以降、川遊びなどに賃貸するものが現われた。

〔替名〕 遊里では客の本名を呼ぶことを避け、もっぱら略称を本名の代わりに用いた。

〔鯛九〕 会津は、ろうそくの産地として知られているので、それによる替え名。

〔陸奥会津〕 今の福島県会津市。

〔鯉川〕 片町と網島の間を流れ、寝屋川に通じる鯉^{こい}江川のこと。

〔閏〕 暦と季節とのずれを調節するために設けたもので、今の暦で一年に一日、昔の暦で一か月、日数が多い。

〔偈文〕 詩の形で仏の徳をたたえ、教理を述べた文。

〔釈尊〕 釈迦牟尼世尊の略。

〔靈鷲山〕 中インド、マガダ国の都、王舎城の東北にあつて、鷲の峰ともいう。

〔那智のお山の御開帳〕 「摂陽奇観」に「享保四年二月十八日より北埜太融寺にて紀州那智山観世音開帳」とある。

〔紫磨黄金〕 紫色をおびた精良な純金。

〔行くもちんつの歌〕 「松の落葉」巻三、山崎通ひ「面白の山崎通ひや、行くも山道戻るも山道、心の留るも山崎」という流行歌を作り変えたもので、木谷蓬吟は「流行唄なり、ちんつは今で言ふ真猫とか二人連れとか云った意、男女の特に親密なのをちん／＼と言ふは大阪の方言である。行く人帰る人、来る人の皆ちん／＼づれなる風俗想察するに足る」と「大近松全集」第十六巻に述べている。紀海音作「心中二つ腹帯」三にも、「女夫の仲はちんちん。去なしたは此母」の用例があつて、天保十二年（一八四一）の「新撰大阪詞大全」に「ちん／＼とは、なかのよいこと」と記してあるから、男女の極めて仲むつまじいことを口三味線にかけて言いなしたものである。

《解説》

野崎参りは、今の大阪府大東市にある福聚山慈眼寺（本尊は十一面観音）に参拝すること、西国三十三か所には入っていないが、徳川時代から一般庶民の信仰を集め、開帳の時期になると、土地の人々ばかりでなく、遊山気分の大阪町人や着飾った女たちが集まってきて、まことににぎやかな情景を展開したものである。

「河内名所図会」に「春は無縁経とて桜花匂ふ頃、秋は紅葉して山々錦なるよし。浪花津の老少ここに群じ、あるは川舟に棹さして道行く人と言葉戦ひして詣する輩多し。是を野崎参といふ」とあるように、毎年無縁経をもよおし、陰暦三月十五日から三十一日までは多数の参拝者がここに訪れた。

観音のある場所は、大阪から東北へ約三里（約十一・八キロメートル）、生駒山脈

が東に尽きて河内平野にはいる低い山麓だから、大阪から行くには天満橋の北より分かれる寝屋川の堤添いに歩いて行くか、寝屋川を屋形船に乗って出掛けるかしたものだが、河内は坦々たる平野で野道は何の変化もなく、川岸の景観も単調なところから、退屈をまぎらすため、堤を歩く人と川舟にいる人とは互いに口げんかをするという風習が生じたものと思われる。近松はそのような事柄をふまえ、やがて生ずる与兵衛と会津客との争いを構成したものであろう。

冒頭の船と新造が意味の上で通じるエロチックな表現や、夜を通して行われる月下の大酒宴は、享保の遊蕩気分をただよわせたもので、近松はしばしば世話物の書き出しに俗謡を取り入れ世相の一端を示した。

「行くもちんつ」の歌は、恋人どうしが親しげに語りあって堤の上を歩く姿を多数の参詣人と共に描き出したものである。

信仰よりも遊樂という参拝客の有様を、歌を交えて浮き浮きした調子で述べたのは、華やかな色調に乏しいこの巻を、せめて最初のところだけでも明るい開放感にひたらせようとしたものであろう。

天王寺屋の小菊

〔二〕 ナホス伝を頼みの乗合船は。借切るよりもとく庵堤。鱸に鮎を漕付け
てよそも一つの舟の内。客は是見よ顔自慢。やゝともすれば痴話事の。
それに委せた身の上も。人も恥し気詰りと。フシオクリ小菊はへ岡へ一